

死

知っておきたいキリスト教のことば (86)

様々な宗教において「死」をどのように捉えるかということは、とても大事なことだといえます。

創世記 2～3 章には、アダムの子の結末として人間の間に死が入り込んできたと書かれています。アダムの子とは神さまの命令に背き、善悪の木の実をエバと共に食べたことです。そのことによってアダムとエバはエデンの園を追放され、地を耕して生きるようになりました。

死は、すべての被造物におとずれる運命といえます。どんな人であっても死を免れることはできないのです。

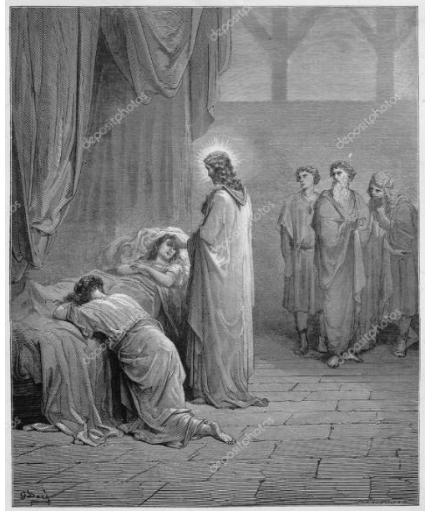
それでは「死」はすべての終わりなのでしょうか。パウロは彼の手紙の中で、このように書いています。

わたしたちは信仰によって罪に死に、死と罪の法則から解放される。そして死は最終的にはキリストによって滅ぼされる。(ローマおよびコリントの信徒への手紙より)

つまりキリスト教の信仰においては、死への恐怖はもはや過去のものだと考えているのです。わたしたちはイエス様によって約束された、復活という希望の中に生きているのです。

とは言っても、やはり死は悲しいものです。愛する人の死によって日常生活は一変し、涙の中からはなかなか抜け出すことができないのが現実です。

しかしそれでもわたしたちは、いつかまた神さまのみ許で会えることを信じ、天に召された方を送り出します。教会ではお葬式のときに、棺覆いや聖卓などに白い布をかけることが多くあります。降誕日や復活日、結婚式と同じように、お葬式でも白を用いるのです。そして「ハレルヤ!」と、涙を流しながら神の国への凱旋をお祝いするのです。



次回は「塩」です。お楽しみに。